

第二章 菅生山大宝寺と伊予すだれ

一 菅生山大宝寺

古代の久万地方の開発とか文化とかを考える場合、菅生山大宝寺の創建がそのもとなっているとされる。

しかし、その創建の年代がいつであったか、またどのような事情によるか、などについては明らかでない。およそ物事の始まりについてはわからぬことが多いので、それは大宝寺に限ったことではなく、ことに古い時代のこととなれば、なおさらである。

「古事類苑」という書物がある。大正二年神宮司庁の発行で、伊予国では由緒ある寺として観念寺・善応寺・石手寺・弥勒寺・大宝寺・等妙寺・竜沢寺の七か寺をあげているが、大宝寺のなかに、岩屋寺もその奥の院として含めて記している。次のようである。

大宝寺ハ伊予国浮穴郡菅生村ニ在リ、文武天皇大宝元年ノ創建ニシテ年号ヲ以テ寺号トスト云フ、モト天台宗ニ属セシガ後改メテ真言宗トナス、四国ハ十八カ所ノ一タリ

と簡単に記してあって、参考書として、「伊予古蹟志」、「愛媛面影」などを挙げてゐる。また岩屋寺については、

岩屋寺ハ同郡七鳥村ニアリ、大宝寺ノ奥院ニシテ嵯峨天皇ノ弘仁六年、僧空海ノ開基スル所ナリ、真言宗ニ属ス、マタ四国八十八カ所ノ一タリ

として、参考書として、「予陽俚諺抄」、「予陽旧蹟俗談」、「愛媛面影」な

どを掲げてある。

菅生山大宝寺の縁起を記したものは、元禄二年（二六八九）に高野山の寂本が編集した「四国遍礼霊場記」を始めとして数多くあって、さきにあげた「伊予古蹟志」もほとんど同様の記事である。こうした書物の欠点はいずれも時代が新しく、江戸時代以後のものであるのは残念であるところが、これらの源流と見られ、現在最も古いものとして、「一遍聖絵」があることは、まことにうれしい限りである。

「一遍聖絵」は鎌倉時代の正安元年（二二九九）に一遍上人の弟子の聖戒が詞書を記し、円伊という絵師が絵をかいた絵巻物で京都の歓喜光寺に所蔵されているもので、その写真版は一遍の誕生した所といわれている道後の宝蔵寺にもある。そのなかに上人が文永一〇年（二二七三）に予州浮穴郡菅生の岩屋という所に参籠したことが絵入りで記され、大宝寺と岩屋寺の縁起が述べられている。やや難解であるが、最も古いものであるから菅生寺に関する部分を記してみよう。

昔、仏法はまだひろまらざりしころ、安芸国の住人狩猟のためにこの山にきたりて、嶺にのぼりてかせぎをまつに、持たる弓を古木にあててはりてけり。そののち、この木よすがら光をはなつ。ひるになりてこれを見るに、うへは古木なり、青苔とところどころにむして、そのかたちたしかならず。中に金色なる物あり、すがた人になり。この猟師、仏菩薩の名跡いまだしらざりけるが、自然発得して観音なりといふ事をしりぬ。帰依の心たちまちおこりて、もつところの梓弓を棟梁とし、きるところの菅蓑をうはぶぎとして草舎をつくりて、安置したてまつりぬ。そののち、両三年をへだてて又この地にかへりきたりて、ありしところをもとむるに、草舎おちやぶれて跡形も見えず。峯にのぼり谷にくだりて、たづねあるきけるに、草ふかくしてあやし

き処あり。たちよりてみれば、ありし養のすげおひしげりし中に、本尊赫奕としておほします。いとうれしくおほえて、かさねて精舎をかまへ、莊嚴をいたして菅生寺と号し、帰依のころさしをふかくす。われこの処の守護神となるべしとちいかて野々の明神といはれて、いま現在せり。

とある。「四国遍礼霊場記」には、狛師の発見したのは十一面観音であり、その時は文武天皇の大宝元年（七〇一）四月一日のこととし、狛師は白日に天にのぼったので、これを高殿明神としてまつたとある。更に「伊予古蹟志」では狛師は一人でなく、明神左京と弟の隼人の二人となっており、安芸国でなく豊後国から移ったとし、四月八日のこととしている。また左京は西明神村の神殿明神として祭られ、隼人は露口村の耳戸明神として祭られたと書かれている。

このように見てくると、「一遍聖絵」に書かれたものが原形であって、時代の下るにしたがって、いろいろとつけ加えられたようにとれるが、そうばかりも言えない。聖戒は「一遍聖絵」の中で、明らかに大宝寺と岩屋寺の縁起を混同しておる所もあるので、そのころの言い伝えを正しく記したとは言い難い。だから、明神左京や隼人の名も古くから伝えられた縁起があったのかもしれないので、聖戒の記さなかった別本によって、「伊予古蹟志」などがくわしく伝えたのかもしれない。何しろ古い時代のことである。私どもは遠い先祖から「こうだ」と信じ伝えられたことを尊重しなくてはならない。

それはともかく、聖戒が今から六八〇年も前に「一遍聖絵」を書き、そのころ既に古いこととして十分なことがわからなくなっていたのだから、菅生山大宝寺の建立の古さというものは大したものだ、と驚かざる

を得ない。

三坂は古くは御坂であって、菅生山へお詣りする坂道の意味だとも言われる。菅生山大宝寺があるために、お詣りする人々のため門前町ができたのが、久万町の起りであると考えられる。

一遍上人が菅生の岩屋に参籠したというのは、今の美川村岩屋寺のことと、そのことは円伊の写実的な絵が証明している。これを菅生の岩屋と呼んだのは、鎌倉時代から既に岩屋寺は大宝寺の奥の院として、両寺は一つの寺と見られていたことによるのであろう。

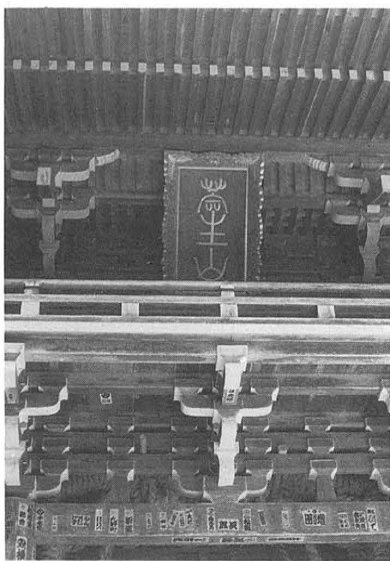
古代の大宝寺の事について、また久万町のことについて確実な史料のないのは残念である。ここには「愛媛面影」（慶応二年、半井梧菴著）にあるものを記しておく。

菅生山は久万町の東に在り名所なり

明玉集

藤原為頼

筑紫へまかる頃伊予の海より雲かかる山を見て



図載面影媛愛額勅

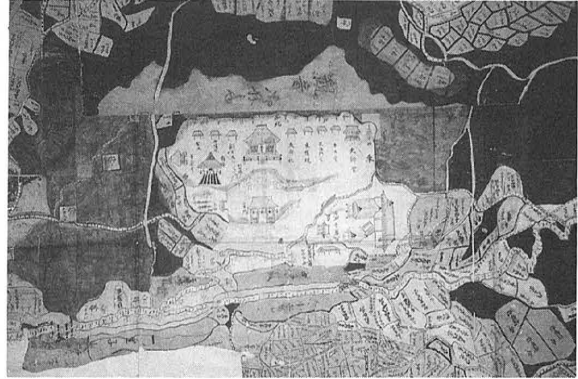
朝なぎにこぎ出で見れば伊予路なる菅生の山に雲のかかれる

大宝寺は菅生山に在り本尊十一面観世音、立像四尺三寸、百済国より渡り来る所の天竺仏なりと云、文武天皇大宝年中に建立せり、仍て大宝寺と号く、二王門の二金剛は運慶作、菅生山の額は後白河院の宸筆也、仁平二年焼失せしを保元二年再造せり、嵯峨大覚寺

の宮住職せさせ給ひし時、勅命に依て大覚院と号すといへり、四国巡拝四拾四番の札所なり、此寺昔は天台宗なりしを、空海奥院を開基有し時、真言宗に改む、旧は四十八坊有しを今は大坊中坊東坊西坊定泉坊十輪坊東角坊新坊西林坊釜田坊理覚坊石垣坊の十二坊残り、

この十二坊も明治七年の火災で理覚坊のみ残り、本堂も現在のものは大正一一年の改築にかかるものである。

大宝寺及び住職の久万山文化の上に残した業績などについては、各時代の中で別に述べることにする。



藩政時代に作製された大宝寺附近の絵図面
(大宝寺所有)

二 古代の道

松山から三坂峠を越えて土佐に達する国道三三号線については別に述べる(第四編交通運輸の条参照)が、古く伊予国と土佐国の国府を結ぶ官道がこの地を通っていたのではないか、という説がある。

官道とは大化の改新による中央集権の確立にともなう、官吏の公用旅行に備えて次第に地方にも整備されていった駅、駅馬を備えた幹線道路のことである。「続日本紀」の養老二年(七一八)五月七日の条に、

養老二年五月庚子土佐国言う、公私の使、土佐を指すにその道伊予国を経る、行程迂遠山谷險難なり、但し阿波国境は相接し往還甚だ易し、請う此の国に就き以て通路と為せと、之を許す

とあり、これは土佐国からの申請に、公私の使が伊予を通過して土佐に入るのは道のり遠く山谷けわしいから、以後阿波より往還したい、と申し出たのでこれを許可したというものである。

伊予における官道が、古くは讃岐より伊予国府に達し、それから西南に迂回して道後平野に出、三坂をのぼり仁淀川に沿うて土佐に出て国府に連絡した、というのは郷土史家長山源雄の説であるが、はたしてどうであろうか。道遠く山谷險難というのは、いかにも久万山を通り仁淀川沿いに土佐国府に出る道をさすのに、ふさわしい表現ではあるが、余りにも遠まわりすぎて実情に適しないように思われる。讃岐国から伊予国府に至る官道に大岡・山背・近井・周敷・越智の五駅があったが、恐らく養老二年までは山背駅(宇摩郡新宮村馬立)から土佐国府に通じたものではなかったか、「伊予国を経る」は必ずしも伊予国府を経るの意味

ではあるまいと考えられる。改められた阿波からの道は、恐らく南部の海岸沿いであろうと解されている。

波止浜出身の故原秀四郎博士は、松木という地名は「ウマツギ」で古代の駅を示すものと考証され、今治市富田の松木を越智駅の所在地にあてられた。上浮穴郡にも柳谷村に松木という地名があるが、松木すなわちウマツギとは決定し難いように思う。また南海道では駅ごとに馬五匹と乗具が備えられる定めで、その駅はだいたい二〇ギおきにあつて、駅戸・駅長がいたはずで、その付近はある程度開発されていたと思われるが、そのような形跡は久万山方面には見あたらないので、太政官道が国道三三号線に先行してあつたとは言えないが、伊予と土佐とを結ぶ踏分け道程度のもは古くからあつたかと思われ、その道に沿う街村としての久万町村が考えられる。

三 伊予すだれ

平安時代中期に出た紫式部の有名な「源氏物語」の浮舟の巻に、
 やをら登りし格子の隙あるを見つけて寄りたまうに、伊予すはさらさらとな
 るもつつまし、新らしう清げに作りたれど、さすがにあらあらしくひまあり
 けるを誰かは来て見んと打とけて穴もふさぐなるべし
 とあり、同じ頃の清少納言の「枕草子」、七二段、いやしげなる物の条
 に、

式部丞の爵、黒き髪の筋太き、布びょうぶの新しき……檢非違使の袴、伊予
 すの節太き、人の子に法師の子の太りたる、まことの出雲むしろの畳み、
 とあるような、「伊予す」、すなわち「伊予すだれ」は久万町露峰に自生

するスタレヨシで編んだすだれである。平安朝の人々の生活に親しまれた「伊予すだれ」は、この地方の古い産物として都に送られたものである。

この伊予すだれの名が、はじめて文中に出てくるのは、平安初期の「宇津保物語」の藤原君二六の条で「繩代かいはづれたる伊予簾を懸けて……」とある。今から一二〇〇年も前に既に小説に出てくるので、相当古い特産物であり、都人の求めに応じて生産にいそがしかったものと考えられ、古代に平野部の開拓がすすみ、人口増加とともに、この山村にも多数の人口移住があり、こうした生産にも従事していたものと考えられる。



伊予すだれ